

令和4年11月15日

報道機関 各位

若者の援助希求行動

自己肯定感だけでなく信頼できる大人の存在も重要

■ ポイント

- ・ 高校生の自己肯定感情と、認めてくれる他者の存在は親への相談行動と関連した。
- ・ 認めてくれる人が多ければ多いほど、親に何でも相談し、自己肯定感情も高い。
- ・ 仲の良い友達の数や助けてもらった経験などは親への相談と関連しなかった。

■ 概要

富山大学医学系疫学・健康政策学講座 立瀬剛志助教らのグループは、2005年生まれの富山県の学生（高校1年生）5,940名のデータを用い、親への悩みの相談と自己肯定感（自分のことを好きかどうか）の関係を分析しました。その結果、認めてくれる人の存在が多いほど、自己肯定感情も高く、親への相談も頻繁にすることが分かりました。

若者が死にたいと思った時の相談相手は親や祖父母が多いとされますが、今回の結果は家族になんでも相談をする若者は、家族に限らず自分を認めてくれる人の存在が重要であることが分かりました。

分析には「得意なことがある」「楽しいことがある」「認めてくれる人がいる」などの10の自己肯定感を支える要素を質問し、「親への相談」と直接関係があるものと、「自己肯定感」に直接関係のあるものを分析しました（表）。そのほとんどの要素は自己肯定感情に関係していましたが、「癩癩持ちではない」「日常にイライラがない」「認めてくれる人がいる」ことが親への相談にも直接関係していました。癩癩やイライラは器質的な側面もありますが、認めてくれる人の存在は、親や先生に限らず若者たちの社会生活の場面で獲得することが可能な資源と考えられます。また「仲が良い友達の数」や「助けてもらった頻度」などは親への相談と関連が見られませんでした。

本結果から若者の自己肯定感情の向上のみでなく、周りの大人が若者を認め褒めることで若者が助けや相談を求めやすくなると考えられます。

■ 研究の背景

国は2016年の自殺対策基本法改正において子ども・若者の自殺対策の推進を盛り込み、若者のSOS（援助希求）行動への取り組みが重要であるとして、SOSの出し方に関する教育

を推進しています。本年度新たに出された自殺対策大綱(2022年10月14日：厚生労働省)においても若者対策の更なる推進・強化を閣議決定しています。しかし若者の希死念慮はより深刻になるほど、友人や家族には相談しにくくなる傾向があり、これは死にたいと告げることで身近な人に迷惑をかけてしまうことへの抵抗が背景にあるとされます。よって親へ相談することへの抵抗の低さが援助希求行動の重要な促進要因であると考えられ、今回、親との心理的分離過程の中にある高校生を対象として、親への相談行動の促進要因を検証しました。

■研究の内容・成果

対象者は、1989年～1990年に出生し、調査時に富山県に在住していた児童全員に対して実施した富山出生コホート研究(富山スタディ)の参加者10,100名です。本研究では2005年に第5回目の調査として実施した15-16歳の高校生1年次の生徒5,874名(男性2,846名、女性3,028名)のデータを用いました。

分析は、自己肯定感情に関連すると思われる9の項目(「健康状態による活動制限」「イライラ」「かんしゃく」「登校拒否感情」「楽しいこと」「得意なこと」「認めてくれる人」「仲の良い友達」「助けてもらった経験」と「親への相談」及び「自己肯定感情」を用いて、パス解析を行い親への相談と自己肯定感情に関連する項目を検証しました(標準化係数 β を算出)。さらにその結果を男女に違いがあるかも検証しました。

親へ何も相談しない生徒が男性で22.4%、女性で13.6%、自分のことが嫌いと回答した生徒が男性で33.9%、女性で45.6%存在しました。親への相談に直接関連した主な因子は良いところを「認めてくれる人」の多いことと「自己肯定感情(自分のことが好き)」が高いことはどちらも親への相談を頻繁にするという結果でした。さらに「認めてくれる人」が多いことと「イライラ」があることは親への相談が多く自己肯定感情も高い結果でした。このことは「認めてくれる人」がいたり「イライラ」するできごとがある人ほど親に相談することが多く、さらにそうした人の中で自己肯定感が高いほどより親に相談していると解釈できます。また、今回の分析では友達の多さや助けてもらった経験などは、親への相談及び自己肯定感情どちらにも関連が見られませんでした。男女別の解析でも同じ結果が得られ、「認めてくれる人」の存在は直接、また自己肯定感を通して間接的に親への相談行動と関連していることが分かりました。

■今後の展開

今回、自分を「認めてくれる人」の存在が高校生の自己肯定感の高さにも援助希求行動の高さにも重要な関連を示すことが分かりました。この結果は、悩みを抱える若者の相談支援の促進には、認めてくれる「他者」の存在が重要であることを意味します。若者がより生き

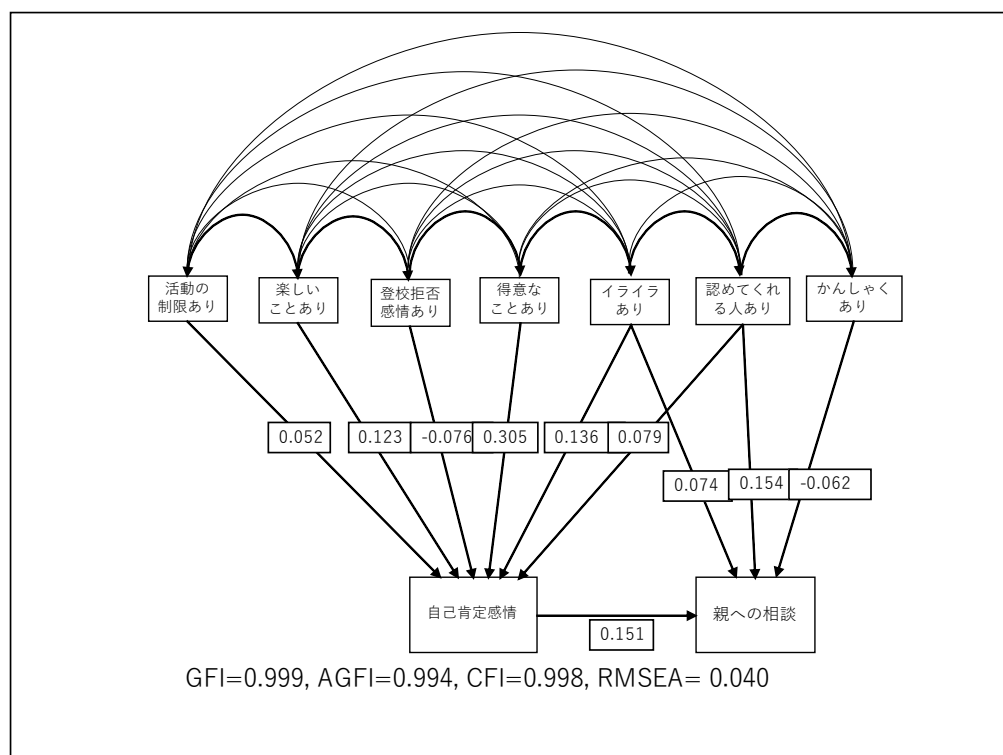
づらさや悩みを相談するために、若者の自己肯定感情を育むことに加え、家族や学校の先生だけでなく、周りの大人一人一人が若者の理解者になって良いところを認められるような関係を築いていくことが重要と思われまます。

表. 高校生の親への相談行動と自己肯定感情との関連因子

	親への相談	自己肯定感情
自己肯定感情	0.151	—
認めてくれる人の多さ	0.154	0.079
イライラする頻度	0.074	0.135
癩癩の頻度	-0.062	—
健康状態による活動制限		0.052
楽しみの頻度		0.123
登校拒否感情の頻度		-0.076
得意なことの多さ		0.305

値は標準化係数 β (p値はすべて <0.05)

図. 高校生の親への相談行動関連要因パス図



【論文詳細】

この研究成果は専門雑誌「厚生指標」に2022年11月号(公開日11月15日)に掲載されました。

論文名：高校生における親への援助希求行動の関連要因

著者：立瀬剛志(たつせたかし)，赤崎有紀子(あかさきゆきこ)，関根道和(せきねみちかず)，山田正明(やまだまさあき)，鈴木道雄(すずきみちお)

掲載誌：厚生指標(11月号)。

【本発表資料のお問い合わせ先】

富山大学学術研究部医学系 助教 立瀬剛志

TEL : 076-434-7270 Email : tatsuse@med.u-toyama.ac.jp